鈴木　じゃあ、ちょっと早速お伺いします。えっと、岡山さんは、えっと、生まれは舞鶴市でよろしかったですか。

岡山　はい。

鈴木　障害の診断名は、もう一度ちょっとお伺いしたいんですけど。

岡山　遠位型ミオパチーです。

鈴木　で、えーと、自立生活を始めたのが 2014 年。

岡山　はい。

鈴木　その頃からですか、JCIL との関わりは。

岡山　そう。厳密に言うと前年だったかな。2013 かな。京都の CIL 全部に私、自立したいんですけどっていうので、お話、聞きたいですって電話をしてて。

鈴木　いつですか。

岡山　2000、多分 13 年。

鈴木　あ、2013 年。

岡山　13 か、でも 12 か、ちょっと、でも完全に正確には。

鈴木　ああ、その辺り。

岡山　で、体験室を一度見せてもらいに行ったことがあった。そんな関わりは一瞬ありました。

鈴木　で、そのときは JCIL に行ったってことなんですか。

岡山　体験室を見ただけで。その後は他の CIL も実はアクスペとスリーピースとに話を聞きに行って、スリーピースが支援しますよって割と積極的に言ってくれて。ちょっと私も、急いでたっていうか、もうこれ早くせなあかんわと思って、それでスリーピースが手を挙げ

てくれた。でも実際スリーピースだけじゃなくて一緒になごみさんっていうところ。なごみさん、ご存じですかね。

鈴木　聞いたことあります。

岡山　理事長が元 JC にいた人で、当事者で、そこと二つで自立に向けて支援してくれるってなって、それからそっちで自立したっていう感じです。

鈴木　で、えーと、その後 JCIL に関わるようになったんですか。

岡山　ある程度、こう、落ち着いてきたら、いろんな所ちょっと顔、出そうと思って。で、村田惠子さんね、なごみの方。そちらから誘われて、京都でやってる障害女性の女性部会、香田さんと村田さんが中心の感じなんですけど。そこのお茶会だったか勉強会だったかに呼んでもらって行って、そこで小泉さんに、うちで働きませんかと割とすぐに言われるっていう。まあ、私、多分そのときに京都、こっちでできれば仕事もしたいなと思っててと話をしたんだったかな。それでだと思うんですけど。

鈴木　その障害者部会っていうのはどこの？　京都市の？

岡山　女性部会は京都市で権利条約実行委員会の障害女性を中心に有志でグループをつくってて、村田さんと香田さんが割と中心で。もともとが多分、京都で条例、差別解消条例を制定していくときにその委員に女性が最初一人もいなかった、みたいな。で、何ということだって言って、その辺から活動し始めてはるって聞いたような気がする。ちょっと正確じゃないかもしれない。やっぱり香田さんは、女性があまりにもそういう場に出て行く機会が少ないとか、意思決定する人たちの中に（女性が）少ないし、そんな中で発言して全然、聞いてもらえないしとか。そういうすごい問題意識をずっと持っておられて。村田さんは多分その条例を作るようなあたりに自立してはるんです。で、村田さんは、いきなりそこに入ってきはってすごい活動を始める、そんなこともあったみたいで。やっぱり障害女性が集まって安心して話せる場とか、いろいろ問題を考えられる場を作りたいという感じで今も続いてる感じですね。

鈴木　そのお茶会に行ったっていうのは大体 2014 とか 2015 くらいですか。

岡山　14 ではない、15 かな。5 くらいかな。

鈴木　で、すぐに小泉さんに誘われて JC に行った。

岡山　来ませんかってすぐ言われて、ゆくゆくは働くことも視野に入れてって結構もう初めから言われた感じでした。

鈴木　で、最初はなんかちょっと通って、みたいな感じで関わり。

岡山　時々、当事者活動の一部に 2015 年ちょろちょろ出たと思います。

鈴木　2014 年で、もう京都市で自立生活、始めてるんですよね。

岡山　はい。

鈴木　で、えっと、正式に働くっていうことになったのって、だいぶ後なんですか。

岡山　いや、2016 の 3 月くらいかな。なので、割とすぐに初めからっていう感じです。このときだ。

鈴木　で、えっと、2017 年に大藪さんと安原さん、あるるの、10 月でしたっけ。2017 年の 10 月に。

岡山　それくらい。

鈴木　来ますよね。安原さんと岡山さんはなんか、こう、お知り合いだったんですよね。

岡山　うん、なんかで出会ってたんじゃないかな。それより前に。JC で活動して仕事始めて、どっかで。松波さんちかもしれないな。

鈴木　松波さん？

岡山　松波さん。松波めぐみさん。すごくいろんな人をつなげてくれはるかたです。

鈴木　そうなんだ。

岡山　そう。それで松波さんちでご飯会とかよくやってはって、そこにこの安原さんも呼ばれて来てはって、私もそこで初めて。多分そこで話したの初めてだと思います。

鈴木　じゃあ、あの、女性障害者部会とかそういうことじゃなくて。

岡山　そうか。松波さんはそっちだ。で、安原さんは松波さんちかな。

鈴木　で、それで知ってて、で、その、多分安原さん、大藪さんとワシントンで会って、一緒に来ない？みたいな話で来られたんですよね。

岡山　だったと思います。

鈴木　で、あの、そのときってあれですよね、もう藤田さんが、アテンダントがなんか使えなくなり始めてて手紙を書かれてますよね、岡山さん。

岡山　そう、そう。2017 年だったと思うんですけど、金さんから藤田さんっていう人がいて、全然、外出できなくなったって言ってはるから、連絡もそう簡単に取れないから、ちょっと手紙でも書いてみてって言われて書いたと思いますね、今どんな状況ですかとか大丈夫ですかとか。

鈴木　それはあれですか。やっぱり 2017 年の 10 月より前ですもんね。

岡山　前だと。

鈴木　前ですよね。で、なんかあれですよね、あの、えーと、訪問することもおっしゃってました？　手紙で。

岡山　えーとね、できれば一度お会いしたいですね、みたいなことを書いたのかな。

鈴木　そうですね。

岡山　かな。

鈴木　でも、なんかすごい偶然だなと思って。その後、大藪さんがいら、たまたま、たまたまですよね。

岡山　たまたまですね、本当に。で、また宇多野の話だってなって、これはチャンスだって感じは私の中でありました。

鈴木　で、大藪さん来られて、まあ、10 月か何かに勉強会でお話しされて、ちょくちょく、こう、来られてたわけですよね。

岡山　えーと、大藪さんが。

鈴木　最初。

岡山　大藪さんは、安原さん紹介してもらって以降、正式的に、じゃあ来ることにしてって小泉さんが言わはって。大藪さんも、あ、じゃあぜひ、みたいな感じだったんじゃないかな。

鈴木　で、なんか、あのー、まあ、ある意味、岡山さんは大藪さん、スーパーバイザーみたいな感じだった。

岡山　私もまだ新人の域やったから、だからこそいろいろ大藪さんになんか伝えたり教えたりできると思うし、教えてあげてね、みたいな。年は近くないけど、新人同士なところで、親近感を持ってもらえるでしょう、みたいな、そんな感じだったんですかね。

鈴木　え、それはどなたかにそういうふうに言われてってことですか。

岡山　小泉さんに言われて。

鈴木　あ、小泉さんね。基本的に、じゃあ、小泉さんがあれに、こう、なんか、こう、指揮してるっていうか。

岡山　そういう部分は大きいかもしれないです。そういう、人の采配的なところとか。でも本体の金さんとかが結構、言ってくれるときとかもあるから。香田さんも時々あるか。あんまり多くはない。

鈴木　で、あのー、岡山さん、声、掛けられてますよね、大藪さんに。何が、何したいのか、みたいなことで。で、そのときに、えっと、野瀬さんの話がっていう、そんな流れですか。

岡山　そうだと思います。

鈴木　で、それで、まあ、行ってみようっていうことになって、もう、すぐ行きますよね、あの、12 月に。

岡山　そうですね。割とね。

鈴木　なんかその辺は、まあ、あれなんですか、いつもこんな感じで、決めたらすぐ行くみたいな。

岡山　うーん、行けるもんならさっさと行動しよう、みたいなのはあるかも。でも、それ多分ね、小泉さんとか渡邉さんとか結構その辺が早いですね、行動が。

鈴木　なるほど。

岡山　ぱって動かはる。それに倣ってる感じはあったかも。私、まだ入って 1 年とかやし、こうしようと、そんなに動ける感じじゃなかったんですよ。なので周りの様子を見ながら、そういうふうにやるのね、みたいな感じだった。

鈴木　なるほど。じゃあ、その、行こうねってことにな、最初に、まあ、声掛けしたのが、まあ、小泉さんとか渡邉さんとか。

岡山　だったのかな。行こうって、行ってみようって。そう、何となく音頭、取ったのは小泉さんとかなような気も。結構そうですね。一気に話が進んだ。大藪さんも多分すごい乗り気やったと思うんですけど。

鈴木　で、あのー、12 月に行かれて、で、とりわけ大藪さんって野瀬さんのお友達だったんですよね。で、あのー、どちらかというと、あのー、野瀬さんは大藪さんが結構、関わってますよね。その、なんか、友人の方が関わるってことについて岡山さん、どう思いますか。

岡山　いや、なんかいい関係やったら、すごいいいだろうって思いますよね。やっぱり初めから話しやすし、すごく。で、一気にいろんな話できるから、状況もね、野瀬さんからしてもすごく分かりやすいやろしとか。それが微妙な関係やったら、いまいち実は好きじゃないんだけど、みたいなのだったら、ちょっとしんどいのかなと思うけど、全然そうじゃないし。

鈴木　逆になんかデメリットっていうか、友人であるが故にちょっと言い、言いづらいとか、逆に岡山さんが友人ではないが故に、こう、聞けたとかそういう感覚ってありますか。

岡山　どうなんでしょうね。そこ、どうなんでしょうね。友人じゃないし、多分結構、気を使われてたんじゃないかなって気はしますね、私は。

鈴木　大藪さんには言えないことを岡山さんに、こう、話せるってことはもうなかった感じで。

岡山　野瀬さんがですか。

鈴木　野瀬さんが。

岡山　あんまりないんじゃないかなって気はします。というか、友人じゃないとかよりも、なんかこの人、何、言っても大丈夫みたいな、そういう感じとかのほうがまた重要やったりするのかなとも思えますけどね。

鈴木　友人であるかどうかじゃなくて。

岡山　というか、友人やったら、まあ、基本的に話しやすいと思うんですけど、そうじゃない場合とかは、この人って割と何を言っても受け止めてくれるからとか聞いてくれるからとかそういうことは結構、重要な気がするかな。あと、女性やから多分、言いづらいとかも多かったんじゃないかなとか。

鈴木　なるほどね。それはちょっとやっぱり感じましたか。

岡山　何となく気は遣われてる気がする。ちょっと緊張されてる気がしなくもないというか。大藪さんとやったら、すごい軽い感じで冗談言いながら話してはるけど、私の場合は、野瀬さんはちょっと、はい、分かりました、みたいな、そんな感じはします。

鈴木　それはあれですか、植田さんとか藤田さんとか田中さん、皆さん男性ですけれども、なんかそれは感じます？　女性であるっていうことで。

岡山　藤田さんはあんまり誰に対しても変わらない感じです。植田さん、植田さん、ちょっとよく分からない。でも何しろ、やりにくさを感じる、なんか気を遣うのは逆にこっちだったのかもしれないとも思いますよね。あんまり、こう、踏み込んでいいのかなって、すごい思いました。女性のほうは踏み込まれたら嫌なこと多いと思うから。お手洗いのこととか。でも男性は、あんまり気にしてなさそうな部分もあるし。看護師さんは女性やしね、大体。その辺どうなんでしょう。

鈴木　特にあれなんですけど、やっぱり性別ってどうなのかなっていうの、ちょっと思ったりとかしたんですけど。男性が患者さんであるときっていうのはちょっと気にする部分も

あるけれども、でも何とかなる部分もあるっていうか、そんな感じですか。

岡山　私がですか。

鈴木　そうですね。

岡山　そうですね。なんか多分こっちが気遣ってるほどは気にしてはらへんなって気はする。でも、やっぱりそこを、じゃあ気遣わずに、ずかずかいくのは違うなと思って、慎重にはいこうって、いつも思ってる感じですね。

鈴木　今回、女性の利用者さんいらっしゃらなかったですけど、もし女性だった場合はやっぱり女性の当事者が関わることって大事だと思いますか。

岡山　思いますね、絶対。そこはすごい思います。そこは男性と女性すごい違うなと思いますね。

鈴木　宇多野ではそういう話は出てこなかったんですもんね。

岡山　女性がってことですね。なんかね、女性、結構、年配の方が多いっていう話を聞いてて。1 人女性で、JC からアテンダント派遣をしてて、アテンダント利用されてる方、その方も、なんかもう宇多野から出るつもりはない、みたいな、そういう方。年も結構、上の方と聞いた。あと、積極的に行けないのは女性の介助者が少ないから。小泉さんもずっと女性は無理って、人がいないって。実際、確かにそうだし。それもすごい影響はしてると思うんですね、多分。これ、女性も潤沢にいて、本当に介助できるよって感じだったらもうちょっと違うふうに、声掛けたりとかしますよね。年齢的なものもちょっと大きいかなと思うんですけど。30 代 40 代の女性がいたとして、病院ですれ違ったとしたら、介助者もいっぱいいる状態やったら、ぱって声、掛けたりするかもしれないと思ったりはします。

鈴木　これ、どうして女性の介助者が少ないのかって、その理由はよく分からないですもんね。

岡山　男性と比べて思うのは、この事業所も男性がロングで。

鈴木　うん？

岡山　ロングで長時間、1 回につき長時間。

鈴木　ロングでね。

岡山　男性は、1カ月にしても時間数そこそこで入れる、がっつり働きたい人が多いですよね。女性はそうじゃない。介助者数は多いと思うんですけど、それなりに。やっぱり細切れになりやすかったり、行けない時間帯が多かったりとか。あとは、一般事業所は男性の利用者のところに女性の介助者が結構行ってるから、他事業所は籍も取られてるんじゃないか説とか。

鈴木　男性の？

岡山　男性の利用者さんとこに女性の介助者が行ってるパターンが他の事業所、多いんですね、結構。

鈴木　そうですか。

岡山　多いです。そっちに取られてるんじゃないか説があるけど、そこも分からない。

鈴木　分からない。でも男性については介助者不足で、なんか、こう、なや、困ることっていうのはあまりないんですかね。

岡山　今の状況、今JCはそう言ってるし、他の事業所でも男性やったら行けますけど話が結構あるって言ってますね。

鈴木　なんか、その、どなたかが退院するってなったとき、その、男性だったら事業所は結構、こう、集まってくるって、そういうやっぱり状況なんですかね、京都は。

岡山　小泉さん、はい、結構そう言ってます。

鈴木　言ってますよね。で、実際そうだって感じですか。

岡山　そうだと思います。

鈴木　で、あのー、野瀬さん訪問したとき、藤田さん訪問されますよね。そのときって藤田さんと会うことも初めてで、で、あのー、まあ、お話しするときに段原さんがなんか復唱したりとかして、やりとりしてて、で、その後あれですよね、あのー、えっと、植田さんも何

か行くって話になってきて、で、なんか担当が、こう、分かれているような感じになっています？　その頃から。

岡山　ちょっとずつそんな感じはありました。

鈴木　つまり野瀬さんは大藪さん。で、藤田さんは岡山さんって感じ。

岡山　中心やから、完全に分かれてないから逆に行ったり、一緒に話してる時間もあるけどって感じ。

鈴木　じゃあ、主にっていう感じ。

岡山　主に。

鈴木　で、えっと、あの、藤田さんの所に、じゃあ行くってなったときに岡山さんは、えっと、単独で行くような感じ？

岡山　それ、いろいろだったんですよね。結構段原さんと一緒のことも多かったし。段原さんが一番多かったのかな。でも、段原さんも行けないし、私だけでいる時間とかもあったし。だから私が介助者に復唱をしてもらうっていう。

鈴木　なるほど。

岡山　聞ける部分。ちょっとね、距離が遠いけど。半分くらい私、聞けるし。藤田さんの声。高橋さんが来てるときもあったし。まあ、その時々でいろいろではあったんですけど。

鈴木　あの、単独で行かれるときってあれですか、バスで行かれたんでしたっけ。

岡山　そうです。バスに乗っていきました、後半になるほど。

鈴木　ああ、バスね。

岡山　最初はみんなで、車で行ったりしてたんですけど。

鈴木　段原さんが行くときは段原さん運転。

岡山　のときもあったし、高橋さん運転のときもあったし。後になるほど、みんなバスでとか自転車で。

鈴木　バスで行く場合って、あれですよね、一応、手帳使えて無料ですよね。大体、あの、訪問時間って1時間半くらいですかね。

岡山　そう。藤田さんのインタビュー面白かったです。

鈴木　ああ、なんか1時間半って言ってて。

岡山　あれね、でも最大ね、多分ね、最大は2時間から2時間半あったと思います。

鈴木　そんなに。

岡山　あります。ちょっと途中は、10分15分20分くらいとか抜けたりはあったけど。

鈴木　基本あれですよね、月1くらいのペースで行くって感じですかね、藤田さん。

岡山　基本的にはそうなんですけど。みんな出た時期によっても違う。3時間って、田中さんと藤田さんの場合はもう月1ペースくらいだったのかな。

鈴木　誰と藤田さん？

岡山　田中さんっていう人は。

鈴木　ああ、田中さん。

岡山　（藤田さん、田中さんには、コロナで）後半が訪問できてないじゃないですか。でも本当は後半になるほど、めっちゃ行かなあかんかった、何回も何回も。実際植田さんとかはもう、高橋さん相当回数、かなり行ってる。

鈴木　週1回か2回って言ってましたね。

岡山　そうそう。でも、田中さんと藤田さんに関してはそれができなくて。でも私、月1やったとして、他の人が違う日に行かれたりして、JCとしては月2、3回とかもあったんじゃないかな、多分。

鈴木　後半は、でも大体1週間1回くらいで行くようになってますよね。

岡山　植田さんの場合。

鈴木　えっと、藤田さんの場合。違います？

岡山　藤田さん。

鈴木　無理か、藤田さんは。

岡山　行けないんだな。

鈴木　コロナだから無理か。

岡山　そうそう。

鈴木　そうか。あのー、えっと、植田さんは 2018 年の 3 月くらいから行き始めますよね。あの、それでなんか、あのー、えっと、植田さんって療育指導室の人から JC に電話かかってきたんですよね。

岡山　なんかそんなことを聞いた気がする。

鈴木　あ、いや、僕がちょっと思ってるのは、その療育指導室の、その相談支援専門員さんって、あのー、どんな感じの人だったのかなって知りたいなって思ったんですけど。

岡山　そのときは、もう今は辞められた方で〇〇さんっていう女性の方で、なんか割とフラットな感じの人でした。基本的に患者さんの思いをちゃんとくみ取るっていう立場の人なんですね。療育指導室、医療と患者さんの間をつなぐみたいな。そういうこともあってか、姿勢がやっぱりある程度、患者さん寄りっていうのがある感じはしました。

鈴木　あのー、植田さんおっしゃってたんですけど、その方から、重訪が使えるっていうことと重度障害者の自立生活ができるっていう話を聞いたっていうふうに言ってるんですけど。その人は、やっぱり JCIL の人たちが訪問したことって、やっぱり大きかったんですかね、そういうことを知ったっていうか。

岡山　かなとも思いますね。2017 年の末から行って、多分その頃、重度訪問介護を使えるよっていう話をして、多分そのチラシを持っていったんじゃなかったかな。

鈴木　なるほど。

岡山　療育指導室に渡した気がするし。

鈴木　渡してます？

岡山　確か。いつ渡したかがちょっとね、ちょっと自信ないですけど。

鈴木　なるほど。あの、重訪で外出できるっていうふうになったのって大体 2016 年くらいですよね。

岡山　16 年だったかな。

鈴木　その前からね。だから、もう一応 2017 年も使えるような状況になってますよね。

岡山　そうですね。

鈴木　で、あの、植田さんも、あのー、岡山さんは一応、何ていうのかな、まあ、高橋さんが結構、関わること多かったけど、岡山さんも関わってたってことですね。

岡山　そうですね、私も結構。多分、大藪さんもそれなりに行ってたし、私も結構植田さんと、また藤田さんのところとはしごしてたとこあった。

鈴木　それ、あれですか、やっぱり藤田さんの所に行くって、その流れで植田さんも行くんですか。

岡山　そうそう。

鈴木　ですよね。植田さん単独で行くとかそういうことはないですか。

岡山　ほぼなかったけど、でも植田さんのほうが時間がめちゃ長くなって、藤田さん後で時間なくなって、ちょっとだけ、みたいなことはありました。

鈴木　なるほど、なるほど。じゃあ、その頃くらいからっていうのは、まあ、野瀬さん、大藪さんと、こう、行っててみたいな感じで、で、岡山さんは藤田さんと植田さんみたいな。

岡山　そうですね。大藪さんも、植田さんの所ちょっと行っといてっていうふうな感じですかね。

鈴木　まあ、訪問するときっていろんな話しされるわけですよね。藤田さん、やっぱり最初は外出のこととかですよね。

岡山　外出、どうにかしてできるようにしようって言ってました、ずっと。

鈴木　でも、その頃は、まあ、退院とかそういう話は出てないですよね。

岡山　最初は出てなかった。

鈴木　で、植田さんはもう退院するっていうことで、そのための話をずっとしてるんですね。

岡山　最初からそれでしたね。

鈴木　あのー、電話とかってどうしましたか、あの、植田さんと。

岡山　電話をかけて話せるときもあったと思う。ちょっと電話したことあるけど、私はあんまりしたことなくて結構、高橋さんが。連絡取らなあかんときは結構お願いしてたんです。

鈴木　えっと、藤田さんは電話。

岡山　藤田さんはね、基本的にできなかった。あの、最後のほう大藪さんの無料携帯を貸して、それで、1 回か 2 回くらいですか。数回でした。

鈴木　電話ですか。

岡山　電話。まず携帯持ってはらへんから、から始まって。

鈴木　田中さんは電話されました？

岡山　田中さんは電話できる。私も 2、3 回あった気がする。高橋さんが結構、話してはっ

た。

鈴木　あのー、なんか訪問にしても、この、電話で応対するにしても、あの、いわゆる、こう、地域相談支援みたいなことやってるわけですよね、あの、国でいう。だけど給付は受けてないわけですよね、地域相談支援給付も。

岡山　地域相談支援っていうのは？

鈴木　あの、総合支援法の中に地域相談支援給付っていうのがあって、それを使えばお金は出るんだけど、それはやってないってことについては特に話したりとかしてないですか。

岡山　いや、あんまりそういう制度は使ってないです。

鈴木　JC 使ってないですよね。

岡山　地域移行支援だと。

鈴木　地域移行支援です。

岡山　地域移行支援は、いや、使ってない。

鈴木　ですよね。それ、使ってない理由ってなんかありますか。

岡山　なんか結局、大したお金出ないなって、そういうことじゃ。周りの手続きが面倒くさいとかじゃないですかね。ちょっと私、その辺、聞いたことない。

鈴木　あ、聞いたことない。

岡山　地域定着も結局、使ってないし。

鈴木　ですよね。使ってないですよね。で、あのー、あのー、なんか今、高橋さんの話、出てたんですけど、JCIL って健常者と当事者の両方が支援に関わってらっしゃいますよね。あのー、健常、なんか、その、お互いのなんか役割の違いとかってありますか。

岡山　うーん。ね。結局、時と場合によっていろいろだと思うんですけど。私も考えてたんですけど。できるところは当事者がやって、できなかったら健常者にやってもらわないと無

理だよね、みたいなのは。まあ、できないところ補ってもらって、やっていけばいいっていうのはもう結構、上の人たちがそうやってるから。だからCILの、結構、当事者が全部やらなあかん、みたいなってるとこあるけど、全然JCはそうじゃない。で、介助者っていうか、一緒に団体活動をやる健常者の個性も結構、私は出るなと思ってて。まあ、出過ぎないように、うまく行くようにすごいバランスを考えながら、みんなやってるなって感じはします。

鈴木　まあ、岡山さん、個人的な意見としては別に健常者が、まあ、関わることについてはそれもそれでありかなっていう。

岡山　常にバランスは気を付けないと。お互いのパワーバランスをお互い気にしながら、みたいな。そこがあまりにもなあなあになると、崩れていきはするかもしれないなとか思っています。

鈴木　今までそういう、ずれみたいなの起こったことありますか。

岡山　うーん、どうなんだろうな。でも、健常者のサポートの仕方を見てると、いつもみんな、よかれと思ってっていうか、障害当事者が簡単に動けなかったりとかするから、健常者がわあってやっちゃって、あ、やり過ぎたなって思って、ぴゅってちょっと引っ込めるみたいなの、いつもやってる、細かくは。だから、あ、やり過ぎたなって、みんな思ってる感じは感じます。

鈴木　でも、ある意味そこでブレーキがかかってるんですね。やり過ぎたなって思えるっていうか。

岡山　多分そこはすごい、やり過ぎたらあかんとかがすごいちゃんと同意が取れてるっていうか、よく理解されてるんだろうなと思いますけどね。

鈴木　なるほど。

岡山　そこ多分、上の人たちがつくり上げるところやろな。

鈴木　逆に当事者がサポートすることの意味っていうのは、あらためてどういうふうに思いますか。

岡山　うーんと、それから、あの、私自身の経験が、サポートされる側の経験からか、それともサポートする側の経験から。

鈴木　サポートする側の。

岡山　する側。

鈴木　ええ。

岡山　する側からすると、じゃあ、結局これ交じるなと。交ぜてしまいます。

鈴木　その交じったところがちょっと面白いなと思って、聞きたいんですけど。

岡山　いや、なんか結局、自分がどうかって思いながら、するじゃないですか。自分だとそういうふうにされる側やったらっていうのをすごい考えながら進めますよね。多分それは健常者より、相当、私は考えるんじゃないかと思ってて。

鈴木　健常者よりもってこと？

岡山　よりも。だって時間がもう既にあるから、もうサポートされる側もたくさん体験してるし。それですごい思うのはやっぱり、障害当事者のサポートされる側の、当事者ならではのよさとか、あと権利とかをやっぱすごい守れるというか、共感を持って、ね、そこら辺、一緒にやっていけるというか。だから私は、自分がサポートされる側のときに障害当事者が絶対入ってないと駄目だと思ったんです。それまで入らないことですごいないがしろにされた部分が多かったから。役所の対応とかね、あと普通のヘルパー派遣事業所の対応とかが結構、上からやったり、障害あるんやからしょうがないでしょうって言われて終わる、みたいな。そうじゃない。そうじゃなく、ちゃんとしんどいよねって、こうあってほしいよねっていうのを実感しながら。まあ、だから自分もサポートされる側の感覚が交じりながらやる感じですかね。そこがすごいいいところ。まあ、健常者でもそれできる人いると思うけど。

鈴木　あのー、逆に、こう、そういう当事者がサポートすることが合わないなっていうふうに言う人っていらっしゃいましたか。

岡山　うーん。直接、私ががっつり関わったわけじゃないけど、聞いた話とか見聞きする感じでは、いつでもお客さまでいたい人とかは多分こういうやり方は合わないんじゃないと思うけど、実際どうなんでしょうね。

鈴木　あのー、なんかJCILでは地域定着支援ピアサポーターって言ってます。ピアサポー

ター。

岡山　ああ、なんかあんまり呼び名が。

鈴木　もちろん、もちろん。

岡山　こないだもそれ話してたんですけど、地域移行、地域定着にしても行政用語やからどうなんやろうなって。で、ピアサポートもピアカンじゃないから、いわゆるピアカンはやってないから、やってることは結局ピアカンやったりするんですけど。いわゆるピアカンじゃないっていうところからピアサポートっていうところ、なんか呼び名がないから使ってる、みたいな感じがあるんじゃないかなって、私の想像ですけど。

鈴木　なるほど。えっと、2017 年の 12 月くらい、入ったときからピアサポートとか言ってますよ、ピアサポーターとか。

岡山　そういう呼び名、何ていうんですか、言わない感じ。便宜上しょうがないから、言わざるを得んから言ってるとこあるとは。何ならいいんでしょうね。その辺、小泉さんとかのほうが考えをちゃんと言ってはるんじゃないかな。

鈴木　で、あのー、その、えっと、何ていうんですかね、あ、あのー、健常者の、逆に、こう、役割っていうのはどう、さっき、なんかできないことをサポートするっておっしゃいましたけど、具体的にどういうことになります？

岡山　障害当事者も能力と体力がとかいろいろなんで、だから、その量を一瞬でこなさないといけないとき、すごい量を一気に、がーって推し進めなあかんような書類作成とかね、そういうのは私には無理やなっていうのが結構あって。今回で言うと、もう絶対、私には無理やわと思ったのが、時間数支給決定してもらうための週間計画、こんだけ介助時間が必要ですよっていう。行政に、ものすごい細かく書いてくださいって言われたんですよね。もう分単位で。この時間、何やります、という。そうじゃないと 24 時間以上、2 人介助時間を下ろせないから。下ろせないっていうか、審議会で説明できるようにしてほしいって言われて。実際、健常スタッフがそのときは林さんだったけど、すごい細かく書いてきてくれたんで、私では、1 週間やそこらであれ全部書くの無理やわって、ちょっと思ったりしました。

鈴木　林さん？

岡山　林ユウキさん。あと本当に電話とかで頻繁にやりとりせなあかんとかも、一部はでき

るけど、いろんな各方面と、それもできる時間帯とかね、どんだけ1日にできるかとかも結構、限界があるなと。あとは、最初の頃は特に、私も大藪さんも病院との交渉とか病院とのコミュニケーションの取り方とかがそんなにうまくできず、どうしたらいいか分からないから、その辺そばで見てて高橋さんに教えてもらった。こうやってやってたらうまくいくよ、みたいなのとか、こういうふうに話したらいいかなとか。

鈴木　病院側に、なんか、その、自立生活センターの説明とかそういうのもあれですか、高橋さんとかやってたような感じですかね。

岡山　高橋さんが、そう、初めの頃からそうですね。そういういろんなやりとり、師長とか副師長あたりとか、あと、指導員の人たちとかとコミュニケーションすごい取ってたと。

鈴木　ご家族への、何ていうんですかね、その、相談に対応するとかそういうこともですかね。

岡山　ありますね。高橋さんが植田さんのお母さんとしてて、私もお母さんとちょっと話したりしたけど、やっぱり対外的なものになると、悔しいけど、健常者スタッフがしっかりしてたら、めっちゃ信頼されるんですよ。そこは障害当事者がかなりしっかりしてても、やっぱり健常者と同じようには見てもらえない感じはある。そういうときはもう悔しいけど、しょうがないから譲る、みたいな部分。小泉さんなんか結構そういう部分うまかった。悔しいけど、そのときは健常者のほうが話がぱっと通るから、もうそっちでやってもらったりすることがあって。それもおかげだと思って。

鈴木　まあ、悔しいけど、まあ、一応それはそれで、一応JCILとしては認めてるっていうか。

岡山　時と場合によります、それも。針、通さなあかんというか、は、もうそれで時間もないしとか。まあ、ゆっくり時間かけてやっていけばいいことやったら、そのうちにだんだん障害当事者が主に途中からなっていくとかはあるんじゃないかなとは。藤田さんとかは。そういえば藤田さんのお母さんとは、私かなり連絡取ってました。

鈴木　あ、そうですか。

岡山　初めのうちから長い付き合いに今なっていってたし、最初の頃はそんなに出会わんかったんですけど、ちょいちょい出会っては話したりしてて。で、自立前になると結構、電してました。まあ林さんもしてたかな。でも私も結構頻繋にしてました。

鈴木　林さんっていうの、え？　林さんって介助者の方？

岡山　介助者なんですけど、途中から、えっと、コーディネーターで藤田さんの。途中から放り込まれた、夏ぐらいですかね、2020 年の。このままいくと田中さんも藤田さんも同時期やから人が足りないってなって。で、それで林さんに入ってもらって。

鈴木　植田さんのお母さんとも結構、岡山さん、やりとりされてます？

岡山　何回かはお話ししました。

鈴木　何回か。

岡山　うん。でもね、明らかにもう植田さんのお母さんは高橋さんのことをめっちゃ信頼してるっていう感じでした。

鈴木　でも、藤田さんのお母さんは岡山さんのことのほうが信頼しているっていうか。

岡山　かもしれない。なんか世間話もよくしてました。あと、田中先生とお母さんが JC でお話ししてもらったんですよね。そのときの話は聞かはりました？

鈴木　田中先生とお母さんが。

岡山　お母さんが。

鈴木　知らない。

岡山　お母さんがすごく心配やっていうこと、いろいろ地域に出た後のこと。このコロナの中、本当にこれで出て大丈夫？ってすごい心配になられて。で、ちょっと田中先生と直接話してもらったほうがいいねって周り、高橋さんとか小泉さんとか言ってて、それで場をセッティングして、JC で。そのときに同席、私もさせてもらって。そこでもたくさん、また話ししてました。

鈴木　で、納得されたような形で。

岡山　そうですね。

鈴木　いつ頃です？　それ。

岡山　あれ、いつやったんやろう。

鈴木　コロナになって 2020 年の 4 月とかに面会ができなくなって。

岡山　その後ですね。かな。えー、いつか。でも 5 月 6 月くらいやったんかな。ちょっと正確な日が思い出せない（→2020 年 4 月 24 日であることを確認していただいた）。

鈴木　で、植田さんのお母さんも JCIL の本体、来てますよね。

岡山　そのとき、お話ししてますね。

鈴木　あ、してます？

岡山　うん。

鈴木　そのとき話す人っていうのは、えーと、当事者のキムさんとか。

岡山　そうそう。あのときは金さんがめっちゃ話してくれたんだ。

鈴木　で、藤田さんのお母さんのときは岡山さんとか、えっと、小泉さんとか。

岡山　お母さんも、何回か来られてて。で、そうですね。お母さん毎回、その、田中先生じゃなくて、来たときはみんな、いろんな人と話してたんです。

鈴木　あのー、自立生活をしてる人のお宅に藤田さんのお母さんって訪問されてます？

岡山　どこかされてる気がするけど。ちょっとどうだったかな。野瀬さんちはまず行ってはった気がする。

鈴木　野瀬さんち。お父さん。

岡山　いえ、お母さん、藤田さんの。

鈴木　ああ、藤田さんのお母さん、野瀬さんの所に行ってるんですか。

岡山　1回は行ってはった気がするけど。

鈴木　へえ、そうなんだ。

岡山　ちょっと私、そのとき一緒に行ってないから、多分、ちょっとうろ覚えだけど。え？野瀬さんのお父さんですか。

鈴木　野瀬さんのお父さんは、でも結構、積極的な人ですもんね。

岡山　でも訪問とかは行ってはらへん気が。なんか割とお任せな方じゃない？

鈴木　ああ。あのー、先ほど、あの、ピアカンの話で出ていましたけど、JCIL ってピアカンは基本的にずっとやってないような感じなんですか。

岡山　あの、いわゆる、あの、メソッドのあるやつ。

鈴木　メソッドのあるやつね。

岡山　あるやつは、それこそまだ上の人たちが今のピアカンの多分、10 年 20 年前ぐらいとかとちょっと違うんだと思うんですけど、まず合わないから無理っていうのがみんなの中にあります。

鈴木　具体的には、そのメソッドってどんな感じのメソッドなんですか。

岡山　多分、講座内容とね、実際やってるのはちょっと違うと思うんですけど。講座の話でいうと、一番 JC の人が嫌だって言ってたのが、時間は均等に割る、割ってお互いに話していくんですよ。均等割りをされて結構、時間、限られるんです。その中で話さなあかんとなったら、言語障害のある人はすごいプレッシャーでつらいって。ピアカンの、理念が、みんな平等にお話ししましょうです。で、昔は時間をたくさんくれなくて、3 分やったら 3 分って、全員 3 分って切られたんですけど。なかなか 3 分ではしんど過ぎてねっていうか。今はそれを言語障害のある人のは時間を延ばして、みんなが 3 分のところを〇〇さんは言語障害があるから 5 分とか配慮されるんですけど、でもやっぱり時間を切って話さなあかんってなったら、すごい焦りませんか、と。

　それがしんどいっていうのと、あと、初めて会った人にもお互いに共感を持ってうなずい

て否定はしないって感じの話をするんですけど。そんな感じで、初めて会う人に何が分かるんと思うと。そういう感じで言われたり。他にもいろいろあるんかもしれんけど。小泉さんとか香田さんと、あと下林さんとかも嫌と言ってました。

鈴木　内容的にはどんな内容するんですか、ピアカンの説明、今、言ってる内容っていうのは。

岡山　その、メソッドのある。

鈴木　メソッドの。

岡山　内容は、これは私の偏見かもしれんけど、ちょっと自己啓発的なところがあって、感情の解放とか自己肯定をどんどんしていく、みたいなそういう感じかな。感情だから、自分が嫌やったこととかもお互い話して、言いづらかったと話してみたりとか。何を話したらいいんですかとか、否定は一切されませんよとか、まあ、そうやって、話していくことで存在自体を丸ごと認めるみたいな。お互いに認め合うという感じですかね。

鈴木　あのー、それと連動するように、あの、自立生活プログラムってあるじゃないですか。例えば、その、掃除だとか洗濯だとか、なんかそういうスキルみたいな、それについて JCIL ってどんなスタンスなんですか。

岡山　多分プログラム組んでやるとなったら、あんまりすべきじゃないと感じ、全体的に。スケジュール立てて、プログラムどおりにお勉強をしていく、みたいな。基本的に型にはめられるの嫌い。ILP もあったほうがいい場合もあるんだろうなって、時には思ってるんですけど。普通の生活のことやんって、なんでそんな計画立てて練習しないといけないのかな、みたいな、そういう感じもあるんではないかと。だから、自立前からそうやって練習していかんでも、自立してからでも経験していく中で慣れていけばいい、そういう感じなんじゃないかなと思うんですけど。

鈴木　あのー、なんか自立生活プログラムの考えの中に、やっぱり当事者が結構もう割かし全部指示して、自己決定で責任を負う、みたいなところがあると思うんです。それについてもやっぱりちょっと JCIL としては、そうじゃないんじゃないかっていう考えがあるってことですか。

岡山　昔はそうやったらしいんですけど、もうそれでは立ち行かんでということがいっぱい出てきて。やっぱり知的障害者の自立生活とかやってると、そんなものは通用しない。あ

とはやっぱり障害が重度な人もいるしねっていう。そういう感じでだんだん変わってきてるみたいですね。

鈴木　なんか、先ほど、あの、香田さんとか小泉さんの話があって、その、言語的に、この、ある意味、こう、障害っていうか、その、なんか、こう、コミュニケーションがやっぱりちょっと時間かかるとかそういうことも関係してますか。

岡山　でもそこら辺は時間かかっても伝えるっていうのを大事にっていう感じがあると思いますすけどね。あと、どんだけ手足論だったのか指示介助だったのかが、私が入った頃にはもうあんまそうじゃなかったから分からないです。

鈴木　じゃあ、あんまり手足論的なものじゃなくて、みたいな。

岡山　そうだと思いますね。でも、すごい大事は大事っていう思いはみんなあって、やっぱ一定は崩せないっていうか、そこ、基本的な考え方として、そこから柔軟にっていう感じじゃないですかね。

鈴木　じゃあ、ある意味、こう、健常者の方も、なんか、その、意思決定に参加する余地はある、みたいな。

岡山　そうですね。多分そこら辺がみんな、なんか過渡期っていうか、もやもやしながら勉強会とかで考えてる感じですね。

鈴木　例えば、あの一、大分だと、あの一、Zoom で、あの、掃除、洗濯、料理、結構、こう、きっちり、こう、やるような感じですけど、あれはどう思います？　ああいう感じの。

岡山　はまれば私はいいと思います。

鈴木　うん？　あ、はまればね。

岡山　はまればいいと思いますけど。そういうのが好きな人は、そういうのあったほうがいい人っていうのがいると思うし。

鈴木　なるほど。

岡山　興味のほうだとか、もうそういうのは出てからでいいんじゃないと思うような人と

かは別になくてもいいじゃないかと。

鈴木　まあ、人に合った形でやっぱり事業所が選べるようにしたほうがいいってことなんですかね、それは。

岡山　それはそうなのかもしれないなと思いますね。駄目なんでしょうかね。でも、なんかJCはずっと。あ、JCがILPやめたのは、なんかうまくいかんかってっていう話、聞いてましたけど。

鈴木　ちょっとその辺り小泉さんにも聞きたいと思います。フフ。で、あと、あのー、えーと、なんか野瀬さんとか藤田さんって、あのー、外出が、こう、できなくて、野瀬さんの場合は食事もできなくて、みたいな感じで、まあ、クリスマスシンポがあって、なんか、まあ、変化が一応見られたけど、でもちょっと変わんなくて、でもあんまり、こう、押さなかったじゃないですか。病院側に対してそれを強く、こう、交渉するとか。

岡山　いや、してますよ。

鈴木　あ、してますか。

岡山　してるんですけど、通らなかったんですよ。もう一度してます。野瀬さん、シンポの年明けに院長を呼んできてくれた。「セカンドオピニオンは院長に言ってください」って院長が言ったから。で、主治医と院長と、担当看護師と、あとそのときたまたま私と段原さんだったのかな。あ、小泉さんもいたか。で、野瀬さんとで、ベッドサイドで何とか食べれるようにできませんか、という交渉というか、話をしたんですね。ちなみに私が参加したのは大藪さんがその日、来れなかったからです。で、そこで、すごい話し合いというか、ピリピリした感じで。その話は野瀬さん言ってはらへんのかな。

鈴木　言ってますね。で結局、でも院長先生が、まあ、主治医の立場に立って認めてくれずにっていうことですよね。

岡山　写真を見て「こんなの危なくて絶対無理です」って院長がめっちゃ言わはって。主治医も、私、自分で言ったから覚えてるんですけど、主治医に「これ、他の病院でも同じ結論、下されますかね」って言ったんですよ。あんまりそういうこと言ったら怒らせそうやなと思いながら、そしたら「絶対同じです」って言われて。結構その主治医も、もう絶対無理ですってそういう感じだった。

鈴木　ただ、まあ、その後、その、何ていうんですかね、さらに、こう、強く出るってことはしてないですよね。

岡山　そうですね。あの場、もうあれでかなり、相当ぴりぴりしてたから、これ以上やったらもうなんか悪くなりそう、みたいな感じもあったと思うし。

鈴木　なんかやっぱり対立関係には、やっぱり持っていきたくないなっていうのはあるんですよね。

岡山　普通に運動を盛り上げるだけだったら、それも全然ありやと思うんですけど。やっぱりその後も、ずっと医療必要なわけで、その後も入院って続く。一生、言われるわけではないけど、続くと考えて、退院後ももしかしたら宇多野にも通うっていうことも考えたらね、決裂覚悟っていうのはできないです。

鈴木　それ、やっぱり、あの、病院側と話をするときにかなり支援する側としては気に掛けてたとこですかね。

岡山　気には掛けてます。その辺、バランス考えながらですよね、本当に。できるだけけんかせずに理解してもらえるなら、そういうふうに話を持っていく。まあ、うまく私はできてないので。

鈴木　病院側で、やっぱりあれですか、あの、例えば地域連携室みたいなところもあるわけですよね、退院支援をする。そこは結構、協力的でしたか。

岡山　地域連携室は、できるだけのことはしますよっていう姿勢ではあった、一応はあったとは思うんです。植田さんと野瀬さんのときと、藤田さん田中さんのときで人が変わってて、私は植田さんのときとかは地域連携室とあんまり関わってなくて、今の副師長やってるかたでした植田さんのときは。そっちは高橋さんがやりとりをちゃんとしてて、その方よく分かってくれはる人でした。

鈴木　副師長なんですか、今。

岡山　今、副師長。ハシドさん。

鈴木　え？　何さん？

岡山　ハシドさん。

鈴木　ハシドさん。

岡山　その方、フラットな感じの人でよく話もしてくれはるし、それで理解もしてくれはるし。その後が、藤田さんと田中さんのときはモリグチさん。モリグチさんっていう看護師さん。

鈴木　モリウチさん。

岡山　モリグチ。その方は地域連携室に来てすぐの人で、よく分からないんですって言われながら。分からないから教えてくださいとか言われるんです。そんな感じだった。で、じゃあ、できることはこっちもできるだけやりますね、みたいな。それなりに話はできましたね。

鈴木　役割分担的にはどうなるんですか。地域連携室は何をしてくれたんですか。

岡山　私は藤田さんのほうでしかがっつり関わってないので、そこだけの話で言うと、医療、医療的なことの退院後どうなるとか、医療・医療的ケアの必要物品をちゃんと調べて当日持たせてもらうとか。そこら辺、病院で分かることはできるだけしてもらって。でも医療機器、吸引器とかの入院中の申請は分かるけど、在宅生活のための医療機器の申請は分からないって言われたから、じゃあ、それこっちでやりますとか。でも、使わはる業者さんは、じゃあ病院のほうでちょっと探しますね、だから使ってるところでとか。そういう感じで手分けしてた感じです。

鈴木　じゃあ、ある意味、連携室は物品の、その、医療関係の物品の、なんかそういう調達とか調整とか。

岡山　もしてくれたけど。

鈴木　もしてくれた。

岡山　あとは、訪看さんと、訪問入浴とかそっちの事業所。ホームドクターも向こうがある程度そろえてくれる場合もあるし、こっちが紹介する場合もあるしとか。もともとが多分、訪看さんは植田さんと野瀬さんの時も多分「響」さんを紹介してもらって、あの(＊＊＊＊カラー@01:07:43)で何とか。なんかその辺がいろいろ。

鈴木　そうですか。宇多野の紹介なんですね、響さんって。

岡山　だと思うんですけど、確か。

鈴木　そうですか。

岡山　田中先生はもうね、JC が、つながりがあるから。

鈴木　そうですね。

岡山　藤田さんのときは、コロナで介助者も家族も病院に入れなかったので、介助と医療的ケアのマニュアル作りを地域連携室がしてくれたのと、訪看さんの一瞬だけ、45 分たったかだけの院内研修が許されて調整してもらえました。そんな感じですね。

鈴木　じゃあ、あの、いわゆる、その、介護事業者とか介助事業者とかは、それは紹介とかはしてない。

岡山　介護事業はそうですね。介護のほうは、そうそうそう、JC のつながりみたいな感じ。

鈴木　で、もちろん、あの、えっと、支給決定のやりとりなんかもしてないですよね。

岡山　いや、全部こっちです。

鈴木　ですよね。あと物件の、探すとかそういうのも全部 JC ですもんね。

岡山　はよ探してと病院から藤田さん言われてました。それからちょっと（＃＃＃＃＠01:09:08）。

（無言）

鈴木　あの、カンファレンスに地域連携室の人も来るわけですよね。

岡山　はい、来ます。

鈴木　あのー、田中さんってカンファレンス何回か覚えてらっしゃいます？

岡山　いやー、私、田中さんは。

鈴木　そんなに、こう。

岡山　出てないです。

鈴木　あのー、藤田さんは何回かやってますもんね。

岡山　あの、藤田さんは、そもそも退院まで外出をどうにかしようカンファレンスとかもあったと思います。

鈴木　んで、あの、自立生活体験室を使って介助者研修できた人って植田さんだけですよね。

岡山　そうです。

鈴木　ですよね。田中さん、リアライズさん、自立生活体験室で過ごされてますけど、あれ介助者研修ではないですよね。

岡山　ではないですね。

鈴木　ですよね。だいぶ前ですもんね。あのー、何ていうんですかね、その、いわゆる、この、ベッド・ツー・ベッドっていうやり方になっちゃ、なったわけですけど、それ、どう、あらためてどう思います？

岡山　本当は望ましくない、それをみんな思ってるけども、でもコロナ禍でどうしようもない中の、どうにか地域移行できる方法っていう感じでしたね。

鈴木　それってやっぱり何ていうんですかね、タイミングみたいなの大事にされてるってことですか。今このときに退院しないと、時間を稼ぐっていう方法も多分あると思うんですけど、準備して、みたいな。

岡山　もうずっと動いてきたのに、コロナに止められて、いつ退院できるかも、待ってたら分からない状況やったからだと思います。もうこのまま行ったらずっと外出できないままだ、みたいな感じやし。あとは、コロナで地域移行の動きがすごいやりづらいのはやりづらいんですけど、病院にいるのと地域生活するのどっちが安全？って言われたら、そんなんどっちって言えないよね、病院でクラスター起きる可能性だって十分にあるし。あと藤田さん

の場合は介助が余計に足りないことになってたと思うから、お母さんもね、週 1 とかで、週 1 か 2 週間に 1 回とかは行ってはって、介助。それに看護師さんが頼ってる、みたいな状況なんで、それがなくなって、さらに看護師さんがコロナで忙しくなって余計、悪い方向にしか行かないですよねって話が。

鈴木　で、あのー、何ていうんですかね、その、医療というふうな観点から見たときに病院と地域ってどっちが安全っていうか安心とかって、支援をする側からしてみるとどうなんですか。

岡山　うーん。医療だけですかね。医療だけ。

鈴木　医療ですね。

岡山　そうですね。なんか起こって一瞬で対処してもらえる、しかも、その起こったことが宇多野の専門、筋ジス病棟専門内であった場合は宇多野のほうが安全かなと思いますけど、(＃＃＃＃@01:14:02)場合ですか。それ以外って、私の感覚では地域のほうが、これも京都市のすぐお医者さん来てもらえる場合ですけど、地域のほうが安全なんじゃないかなとかって思いますよね。宇多野の中にいると専門外やとなかなかね、医療が、専門外が受けれなかったりとかもしてるし。いくつかの筋ジス病棟でがんが見つからないまま末期まで気付かれずにとか、やっぱし聞いたりするし、本当に。

鈴木　あのー、野瀬さんが退院されて、えっと、2019 年の確か 7 月退院されて、なんか当初、何か救急搬送されるっていうことがあったと思うんですけど、あれ、やっぱり何ですかね、十分、こう、野瀬さんの、こう、医療情報っていうか、身体的なこととか、うまく病院と地域との間で連携が取れなか、てなかったってこと関係してますか。

岡山　あー、ちょっとそこ、私は分からないです。それ高橋さんに聞いてもらって。

鈴木　なんか、その、カンファレンスとかであんまりあれですかね、そういう地域の、その、田中さんとか響さんとかが病院の、その、関係者と、その情報を、こう、きちんと、こう、やりとりするってどこまでできてたのかなってのがちょっと気になるところなんですけど。

岡山　いや、カンファレンス以外でも一応やりとりはしてはると思いますね。

鈴木　そうですか。

岡山　医療情報をちゃんと、診療所の提供とかもしてはるし。で、電話とかでも直でどこまで話してはるかとかはちょっと分からないですけど。でも、こっちが思って、理想やなと思ってるほど密では、もしかしたらないかもしれないとは思うんですけど。

鈴木　で、まあ、岡山さんの感覚として、地域でやっても一応、こう、何か、こう、問題が発生しても訪問、訪問医っていうか、その、田中さんとか響さんとかで十分、こう、対応して、問題に、こう、対処できてるかなっていう感覚はある。

岡山　多分最初からは全部、完璧にちょっとできないのかなって気はするんですけど、慣れていくと大丈夫な気がします。

鈴木　で、今、あの、藤田さんの入浴のことがいろいろ、こう、問題になったりとか。まだ、あれはあれですよね、まだ解決してないってことは。

岡山　あれ多分そう。完全には解決してないんじゃないかな。多分コロナのことで、多分、任せてると思うんですけど。

鈴木　やっぱり訪問入浴っていうのは結構、難しい部分もあるんですかね。

岡山　私が訪問入浴、利用したことないから想像ですけど、聞いてる話では介護保険系の感覚。介護保険っていうのは短い時間でぱぱぱって、終わらせるとか、あまり丁寧じゃなくて、何ていうんですかね、障害者介助の感じでやってないんじゃないかなと、ちゃんと本人の意見、聞きながらできていない。そういう感じがすごいありますね。

鈴木　なるほどね。やっぱり地域だとそういう、いろんな事業所と、こう、連携しなきゃいけないっていう部分がやっぱり難しいなって感じなんですかね。

岡山　そうかもですね。

鈴木　介護事業所は結構、まあ、うまく回ってるような感じですかね、そういうトラブルもなく。で、あのー、支給決定って、あのー、十分、こう、まあ、先ほどなんか、まあ、やりとりを重ねてなんか細かいとこまで書かなきゃいけないとかあったと思うんですけど、でも、それ出した後は、基本的には望んでる時間数は下りてるような感じですよね。

岡山　大体、下りてると思いますけどね。大体ですけども。藤田さん、もっと欲しいとかってあるかもしれないけど。

鈴木　でも、その前、例えば、その、藤田さんだったら外出のための重訪のやりとりとかってあって、えっと、城陽市でしたっけ。

岡山　城陽市です。

鈴木　なんか、そこでなんか、なかなか、こう、出してくれなかったりとかします？

岡山　そうでした。その辺、京都市と城陽市、全然、違うと思います。京都市は柔軟です、いろいろ。逆に城陽市が、経験がないんですね、あんまり。重訪もそんなに出してないし、障害当事者が少ないっていうのもあって何かと結構、細かい部分を言われるみたいですね。病院からの外出の重訪くらいすぐ出してくれればいいのにって感じなんですけど。多分、京都市だったらすぐ出ます。かなりあれこれ言われて、病院とカンファ、お話し合いをしてから、みたいなこととか言われたりしてましたね。

鈴木　でも、この場合、一応藤田さん出たんですよね、支給決定が何時間か。

岡山　出ました。でも、こっちもいろいろ譲りました。

鈴木　10 時間でしたっけ。

岡山　なんか初めは、そうそう。ほんでもうどんどん外出する予定だったんですよ。なので、もっと時間数多く、なんか毎週外出くらいの勢いでしてたら、そんなことできるか保障もないと思います。だから、その状態で出せませんって言われた。しかも病院の同意が要りますって言われて、病院の同意は要らないんですよって厚労省の通知を見せて、そこをまずクリアし。でも、それでも今、外出できない状態だし、そんなたくさん出せませんとか言われて、かなり時間数下げて出してもらってたんでしたね。

鈴木　でも、まあ、その後コロナになって結局、使えなかったんですよね。

岡山　そう、使えなかったです。

鈴木　で、あとは、あのー、あれですよね、その、医療的な、その、ケアの研修もやろうとされてましたよね、病院の中で。

岡山　はい、してました。

鈴木　でも、それをやる前に一応、重訪の支給決定をしようってことで支給決定されて。ただ外出となると、やっぱり 3 号研修って話が必要になってくるということで。

岡山　そうですね。いや、なんかそれも別に 3 号はなくても、まあ、違法性阻却、便宜があるから主治医が許可さえしてくれれば、お母さん一緒でもいいから外出させてもらえてよかったんですよね。

鈴木　なるほど。

岡山　無理やから、じゃあ、やっぱり 3 号取ってっていう話に。ゆくゆくのこと考えて 3 号、病院の中で取れるようになったら地域移行を今後みんながしやすくなるねって、そういうのがあったと思います。

鈴木　で、えーと、12 月でしたっけ。秋頃に国立病院機構の人と話し合いをしてっていう話ですよね、2019 年の。

岡山　そのほうがいいって。

鈴木　で、一応その方の話だと、まあ、病院の中で研修を行えるって話をしてるんですか。ということは、コロナになってなかったら一応、研修をやってた可能性と。

岡山　それがね、分かんない。宇多野がうんって言わなかったから。

鈴木　あ、そうなんだ。

岡山　宇多野の看護師さんじゃなくて、外から訪看さん入ってもらってでもいいんですよっていうのとかも言ってたけど、まだそういう用意ができてませんとか、うちにできるとかいろいろ言われて。

鈴木　あのー、3 号研修の意味ってちょっと聞きたいなと思ってたんですけど。野瀬さんとかって、まだ全員が 3 号研修、受けてなかったりとか。

岡山　あ、そうなんですか。

鈴木　確かそうだったと思うんですけど。JCIL としては、基本は 3 号研修、受けてもらい

たいっていう考え方なのか、それともやっぱり違法性阻却っていう手段もあるっていう。

岡山　どうなんですかね。あんまりその話は、私は聞いたことがないんです。

鈴木　あ、そうですか。じゃあ、そこまで何ていうの、なんか、受けなきゃみたいなのは、そういう感じでもない。

岡山　そこまでではないかも。取りあえず、常時入るなら、まあ、一応取っといてもらおうかっていう感じじゃないですかね。

鈴木　じゃあ、その何ていうんですかね、取りあえず医療的なケアって部分でなんかトラブルが起きたり問題が起きたりとか、そういうことは今まで退院された人ではないってことですよね、介助者の方で。

岡山　細かい話は聞いてないから分からないです。大きくは、野瀬さん入院したかった話とかくらいですか。入院したら多分、それも誰がどう悪かったっていうか、その辺がちょっとよく分からないし、担当も。

鈴木　あと、あのー、えっと、まあ、退院するっていうことになると、なんか物品をいろいろ、こう、買わなきゃいけなかったりとかすると思うんですけど、植田さんと岡山さんは、なんか家電に、を見に行って、買いに行ったりとかされてますか。

岡山　あれね、私も大藪さんも行ってるんですけど。植田さんが結構、外出ができた人やから家電、見に行くのとかめっちゃ楽しかったみたいで、それもあって何回か見に、一緒に行って、1 人暮らしでこういう冷蔵庫のほうがいいですよとかそういう話をしただけで、別にそれを植田さんはそのとおりにしたわけじゃないと思うけど。一応アドバイス的な、私はこうしてますよ、みたいな、そういう感じ。

鈴木　あの、家電を、こう、見て買った人っていうのは植田さんだけですよね、結局。

岡山　そうですね。

鈴木　退院前に、ですよね。田中さんも結局コロナになって外出できなくなって。

岡山　あ、でも野瀬さんは、ある程度は Amazon とかで買って、後から買いに、退院してから見て買いには行ってはる、確か。

鈴木　あのー、何ていうんですか。その、そこはなんか、何ていうんですか、その、家電を見に、買いに行くっていうのってなんか健常者でもできるような気がするんですけど、でも岡山さんが行ってるんですよね。それ、なんかやっぱり当事者がそこに関わるっていうことに、なんか意味があったっていう。

岡山　できるだけそういうときに当事者、できる限りは一緒に動こうっていうのはあるんですね。で、家電とか家具とかでいうと、車いすでは、まあ、例えば私だったら冷蔵庫は私は引き出しのやつ見にくいから引き出しがないのが見やすいですけどねとか、そんな話とかはしてた気がする。でも植田さん、結局、引き出しのやつ買ってた気がする。

鈴木　フフ。それってあれな感じですかね、その、なんか当事者目線で、なんかそういう家電とかってやっぱり選べるものってのがあるってことですか。健常者ではちょっと気付かない部分とか。

岡山　それはあると思います。

鈴木　ありますか。

岡山　多分いろいろと、あ、こっちのほうがいいなっていうのとか。

鈴木　ヨドバシとニトリ行ったんですか。

岡山　そうです。ニトリとか。

鈴木　1日とか2日で行ったんですか、それ。

岡山　私、2回は行ってると思うけど、大藪さんも2回くらいは行ってた。

鈴木　結構、行ってるんですね。

岡山　ではないのかな。

鈴木　なるほどね。

岡山　半分趣味みたいな感じでしてはるからとか。

鈴木　そのとき植田さんってJCのヘルパーさんと一緒に行った。

岡山　そうです。

鈴木　あと、あの、物件が選ぶときって、なんかどんなふうに、その、物件って探されてるのかなって。一応、選択肢を、こう、あるわけですよね。

岡山　そうですね。あんまり長いこと不動産屋さんに何回も通ってっていうのは結構、難しかったりするんですよね。まあ、行けるならそれもありなんですけど。特になかなか外出、難しい場合は。あとは、これ高橋さんが中心に段原さんも結構、見てくれはった。京都駅前のアパマンショップが割と対応が良くて全部そこにお願いしてるんじゃないかな、確か。URは違いますけど。URは見ていません。

鈴木　じゃあ、そこら辺は、じゃあ、段原さんとか高橋さん、健常者が一応、行くような感じなんですね、不動産は。

岡山　でも一緒に行ったりもしてるかな。一緒に行ったときもあったんかな、なかったかな。そのお二人が行ってこうだった。車いすで行けるとこで実際に出してもらって、それをみんなで見て、検討して(＃＃＃＃@01:29:26)で。内覧も、行けない場合は行ってもらって、動画とか写真撮って。

鈴木　URっていうのは結構JCの利用者の人いらっしゃるんですかね。

岡山　そうですね。

鈴木　多いんですか。じゃあ、結構、まあ、昔からというか。

岡山　やっぱり、生活保護内で借りれて、しかも広い。

鈴木　割かしあれですか、比較的簡単にっていうか、URの物件って借りられるんですか。

岡山　借りれると思います。審査とかが少ない。障害者やから拒否されるってことはまずないし。多少ね、普通に物件を出さない場合もね。

鈴木　まあ、あれですかね。でも、あのー、当事者からすると、まあ、いろんな所、見たか

ったけど、でもなんか時間もなくてとか。

岡山　そうですね。

鈴木　やっぱ退院、急がれてたとか。

岡山　うーん、退院。なんか大体、日がもう退院の、に向けて動き出してるとせわしなくて、なかなか。植田さんとかは結構いろいろ検討しはったんちゃうかな。野瀬さんは外出できないから、そもそもあんまりあれこれ見にも行けないし、そこが大きかったんじゃないかなと思ってて。

鈴木　物件って比較的、こう、あのー、バリアフリーで車いすも使えてって、そういう物件って選択肢はあるような感じですか。

岡山　いやー、少ないですよ、まだ全然。

鈴木　少ない。

岡山　全然、少ないです。やっぱり高くても無理ですしね。

鈴木　それはやっぱある程度、こう、生活保護とか基礎年金とかでもやっていけそうでっていう、そういう物件を不動産と、こう、探してってことなんですよね。

岡山　そうですよね。なんか、私、個人的には、初めから車いすで行けるって分かる物件から探すんじゃなくて、もういきなりインターネットとか見たり、店頭に行って、これがいいです、これがいいですって言って、そこから車いすOKか聞いてもらうパターンで行ったんですよ。もうめちゃ拒否されました。

鈴木　そうですか。

岡山　そうです。だからそうじゃなくて、みんなこういう場合の人は車いすで行けることとかまず初めに全て聞いた上での、そういう物件を紹介します。

鈴木　なるほどね。

岡山　不動産屋さんにもそこだけまず動いてもらってから、これありますけどって言った

中から選ぶから、少なくもなるし、条件的に結構、厳しいからそんなにたくさん出てこないし、ぐらいですかね。

鈴木　あと、あの、すみません。訪問するときって病室の中で話しますよね。それってどうでした？　なんか病室って患者もいるし看護師もいるし、十分話せたのかなって思ったんですけど。

岡山　話しにくいこともありますね。あるけど、当初思ってたほどは気にせずに話してました。

鈴木　ああ、そうですか。

岡山　なんかもういっか、みたいな。もちろんやっぱ話しにくいこともいっぱいあったし、ちょっとぼそぼそ話したりしてることもあったし。

鈴木　なんか、その、面会室みたいなの宇多野にはなかったんですかね。

岡山　ちょっと広い談話室的な、まあ、廊下とつながってるんですけど、そういうスペースとかもあるし、多分、借りようと思えばあるんやろうなって感じやけど、そこに移動するのがすごい大変なんですよね。

鈴木　なるほど。

岡山　だって移動、看護師でないとできないって言われてる時点でもういろいろ厳しいとか、そうじゃなくても移乗する時間が決められてたりとかね。田中さん結局、結構、時間決められてる感じだったし。

鈴木　今後やっぱり、こう、支援をしていくっていうふうになったとき、やっぱりプライベートで話せる時間で話せたほうがいいですよね。

岡山　絶対いいと思います。一つ病室でいいのは、他の同室の患者さんたちにちょっと聞こえるから、そういうね、なんかいい影響もあるかもなって。

鈴木　そういう反応ってありました？

岡山　植田さんはね、藤田さんとこに私たち行ってて同室やったから、なんかいっぱい来て

はるって、その影響もあったんじゃないかなと思うんですけど。その話、いつやったか植田さんに聞いたら、忘れたとかって。

鈴木　僕も実は聞いたんですけど、それはあんまり関係ないってふうには本人は言ってるけど。でも、まあ、なんか動きはあるっていうの分かりますもんね。

岡山　と思うんですよね。めちゃというか、わさわさ行ってたし。

鈴木　フフフ。で、あの、わさわさいるとこ、看護師長とか、その主治医とか、とか、その、興味を持って聞いてくることって、看護師さんとか。

岡山　いや、ほとんどない。

鈴木　あ、それはないんだ。

岡山　かな。多分、主治医なんて出会ったことなかった。看護師さんは、でもなんかうろうろしてはるから何となく気になってはるんやろなとかは思ったり、あの、高橋さんとかは、初めからコミュニケーション取ってたから、それなりに話してたかもしれないですね。

鈴木　なんか、あのー、植田さんもおっしゃってたけど、看護師長さんとか植田さんの主治医さんって『バリバラ』見たりとかして知ってたっていう。そういう人もいるんですね、だから。

岡山　そう、いるみたいですね。

鈴木　でも、まあ、こちらから意識的にそういう話をしないと向こうからは、まあ、聞いてこないっちゅうか。

岡山　あんまり、そうですね。忙しそうではあるし。

鈴木　なるほどね。で、あの、退院した後って、地域定着支援っていうふうに、まあ、その言葉は行政用語ですけど、なんか、まあ、一応は手厚くサポートすることはやっぱり必要かなっていうふうに思いますか、人によっては。

岡山　人によってはあったほうがいいんじゃないかなと今回、思いましたね。あんまり JC はその辺、力を入れてするっていう感じじゃなかったみたいなんですけど、今までは。知的

の人に介助者が中心でその辺、結構、関わってたと思うんですけど、当事者がすごい手厚く関わるっていうのはこれまで、宇多野も前はあんまなかったんじゃないかなと。

鈴木　それは、えっと、知的の人たちっていうのは特に、まあ、介助者がいろいろ、こう、やってくれる部分があるからということなんですかね。

岡山　はい。ちょっとずつ経験していこうねっていう感じがあったと思いますけど。身体の場合は、ちょこちょこ訪問したりとか話したりとかはあったと思うんですけど。意識的にどんどん入っていくっていうのはあんまりなかったような気がするんですけど、聞いてる感じでは。

鈴木　その、なんか、そう、定着、定着っていうか、その、退院後の、その、支援がしたほうがいいっていうの、なんか、それはどうしてですか、その身体の人に対して。

岡山　自分でそこそこできる人の場合は、脳性まひの人とかね、割と自分で動ける人が多いじゃないですか。その場合って自分でどんどん学んでいく感じとかある、それも、まあまあ、力があるかどうか問題はあるかもですけど。やっぱりかなり重度の身体障害者であれば、ベッドから動けないから、待ってる時間が長いことがあるんじゃないかなって。だから、そういうのがあったほうがある程度いいかなっていう感じがします。本人、嫌やって言ったら、もういいんじゃないかなって気がしてる。

鈴木　待ってるって、何も、こう、せずっていうか、ちょっと受け身的になってしまうからってことですか。

岡山　みたいになりがちもあるんじゃないかなって。どうしたらいいかも分からないまま、コミュニケーションもなかなか、ね、取りづらかったりする中で。

鈴木　じゃあ、そこは、えっと、何ていうんですかね、そのサポーターっていうか、そういう人が行って、みたいな形をつくったほうがいいっていう。

岡山　じゃないかな。植田さんと野瀬さんに対してはそんなにできてなかった、やってなかったと思いますね、地域定着支援ってことは。で、その状況を見てて特に、高橋さんとかがそれこそなんかやったほうがいいんじゃないかなっていう。で、多分みんなをそっちに引っ張ってたんじゃないですか。で、藤田さんの場合は結構、田中さんはそこまで入ってないかな。田中さんは、あんまりそういうのが好きじゃない感じもあった。でも、ちょっとは入ったほうがいいんじゃないかっていう雰囲気になったと思いますね。

鈴木　じゃあ、藤田さんは結構ね、野瀬さんをかなり、こう、頻繁に行ってらっしゃいました。

岡山　あれはでも野瀬さんの思い、どうなんでしょうね。自分があんまりそういうのしてもらえなかったからあったほうがいいって思ったのか。それとも野瀬さん、なんか仕事っていう感じが、やりがいめっちゃあるみたいな感じはあるかも。どっちもなのかなとか思ったりするんですけど。

鈴木　まあ、何ていうんですか、まあ、藤田さんの場合いろいろ、こう、入浴の問題とか最初にいろいろあったりとかするっていう、そんなこともあってやっぱりサポーターが行ったほうがよかったかなと。

岡山　そうですね。まあ、基本的に問題が起こったら、当事者入れたら、当事者相談で入れたほうがいいっていうのはJCの中にずっとある。あるんですけど。

鈴木　なるほど。

岡山　あの、でも、そこまで積極的に入れっていうふうにはあんまりこれまではなってなかったんじゃないかなって気もする。

鈴木　基本、当事者、行くって感じですか。

岡山　できれば。拒否されなければというか、まあ、できるだけそれは当事者が当事者を助けるって理念で。だから、大切にしてることは大切にしてる。

鈴木　誰、行くってそういう話にして、手、挙げてもらうってことですか。

岡山　どうなんやろう。その場その場で、小泉さんとかが誰々さん、誰々さんとこ行ってって言ってる場合もあるし、全体会議の中とかで、下林さん行ったほうがいいんじゃない、みたいな。いろいろですかね。

鈴木　でも、植田さんはどちらかいうとあんま入ってなくて、引き続き高橋さんとかですかね。

岡山　まあ、入ってないこともないんやけど。たまに、こう、みんな訪問したりはしてたけ

ど。でも植田さん、どうなんかな。そういうの来てほしいのかどうなのか、みたいな感じも。自由にカフェとかめっちゃ行きたい、みたいな。

鈴木　でも、なんかカフェ始めてね。

岡山　そうですね。その辺をうまく見つけ出してくれたのは、あれですね、伊藤さんって感じで。

鈴木　でも最近あれですよね、南丹市の近日の、高校生ですかね。

岡山　はい。

鈴木　そのサポート始められ。

岡山　まだ始まったと言えないと考えてる。

鈴木　まだ始まってない。

岡山　まあ、ちょっとはじ。

鈴木　動き始めてる。

岡山　動き始めるのかなって感じですかね。

鈴木　あのー、なんか在宅で、近日で自立生活を考える人をサポートするっていうのが何件か、こう、入ってきてるような感じですか。

岡山　いや、今んとこ、そこはその人と脳性まひの人、2 人です。

鈴木　それだけですか。

岡山　それだけです。そこも話がいろいろ、まだそんなに詰めれてないけど、自立生活じゃなくて高校卒業後どうしよう？っていう。

鈴木　その段階ですもんね。

岡山　JC としては就労よりも、支援学校と繋がりたいっていう。向こうは就労、できれば働きたいって。

鈴木　なるほど。で、そこにあれですよね、なんか、あの、植田さんも何だ、ちょっとコミットしようかな、みたいな感じ。

岡山　もともと植田さんのお知り合いの亀岡の人が、ぜひ JC さんに入ってもらえませんかって。

鈴木　それ、なんか、その、今まで植田さんサポート受けてきましたけど、これからは、こう、サポートする側に、こう、なり、なってるっていうか。それは、まあ、自然の流れでそういうふうになってったって感じですかね。

岡山　なんか植田さん、何となくそういうのやりたくなってきたんではないですか。

鈴木　なるほど。なんかそういう、なんか循環が、こう、なんかあって、なんかすごいなって思うんですけど、なんかやっぱりそれが、当事者が、こう、中心にやってるってことの意味なんですよね。

岡山　それはあると思いますね。なんか自分もできるんじゃないかなとかも思われたりするやろし、健常者ばかりが動いてると、自分には何もできないわ、以上、みたいな方になっちゃうんですね。

鈴木　でも、まあ、田中さんご自身はなんかそういうよりも、なんか、まあ、ちょっと距離、取りたいかなっていう感じなんですかね、今のところは。

岡山　よく分かんない。でも時期とかもあると思うんですよね。植田さんも初め全然、興味なかったやろし。だんだんね、自分のやりたいことそれなりにやってて何年かすると、何だか暇だな、つまらないなと思い始めたりもするんかなとか。そういう意味では、田中さんはまだコロナ禍やから全然、動けてないし、行きたいとこも行けてないし、まだまだ自分の好きなことやりたいって思いもあるんじゃないかなとか。

鈴木　あの、田中さんのご両親と、でも植田さんって会ってますよね。あの、そのとき岡山さん、いらっしゃってない？　あの、リアライズの体験室で。

岡山　そこには私、いなかった。

鈴木　あ、いない。でも、なんか面白いなと思うのは、その、野瀬さんにしてもなんか、途中から田中さんの、なんかセルフプランの作成に関わってるようになったりとか、退院した人がなんか、これから退院する人に、こう、自然に、こう、関わっていくような、なんかそこが、なんか本当、面白いなっていう。

岡山　みんな一緒にやろうっていう感じにはしてるから、意識的にちょいちょい入ってもらったりとかはしてると思う。

鈴木　一応なんかみんな、みんなというか、植田さんも週 1 回とかで本体、来てるわけですよね。接点があって、そのときそういう話が出てきて、みたいな。

岡山　でもなかなかうまくいってなかったですよ。週 1 回来てもらってても、何となく自分がやりたいこととかできることをぶつけられるの、何となくいるだけ、みたいなってしまいがちやったり、それをうまく、周りもどうにもなかなかできんかったりとかね。難しいですけど、そういうの。

鈴木　藤田さん、まだ来れてないですよね。

岡山　藤田さんはまだ外出がそこまでできてないから。

鈴木　ですよね。でも、そこら辺の、なんか僕も、あの、野瀬さんが地域定着してるの見たとき面白いなと思って。あの、事務所で、こう、起こってる出来事とか、野瀬さんが、こう、あの、説明されたりとか自然な、こう、会話の中で、なんかそれってすごい大事だなと思って聞いてたんですけど。

岡山　野瀬さんは、そして、仕事したいとか人の役に立ちたい願望、結構、強い。

鈴木　なるほど、なるほど。

岡山　初めから強かったと思いますけど。

鈴木　あのー、まあ、あの、JC としてはいろいろこれからも退院支援とかされると思いますけど、病院にいる人っていうのがやっぱり、いたいって思う人は、それは、あの、尊重して、その中でちょっと生活を、こう、改善っていうか、そういうこともなんか求めていくような感じなんですか、これからは。

岡山　これ、細かいところで人によって考え方、違うかもなんですけど。私は今、現状として、あそこで生活してる人がつらい状況に置かれてる話がいっぱいあるから、それは改善をしないといけないと思うんですよね。と同時に、出たくないって言ってる人にも一定の情報提供というか、地域でこういうふうに生活できるんですよっていうことは伝えて。出たくないって言ってるのは知らないからであったりとか、その意欲を完全にそがれてたりとかそんな状況があるから、それがある程度いろいろ知ったり体験できた上でそれでも出たくないっていう意見になるかどうか。だから、意欲を別に無理やり強制するんじゃないけど、いや、むしろ奪われてる状況だと思うので、そこを何もせずに、出たくないからじゃあそれでいいですね、じゃないとは思ってる感じ。

鈴木　今後、じゃあ、そういう働き掛けもしていくような感じ。

岡山　できればいいんですけど、難しいなと今の状況では。私、筋ジスプロジェクトの報告書で女性の生きづらさのところを担当したんですけど、そこには、特に女性がいかに声をあげづらいかということを書きました。抑圧的環境だから自分の希望を言い出しにくいというだけではなく、意思や意欲を奪われているなんて思いつかない状況もあると思います。患者さんっと繋がってそれを変えていけたら地域移行の希望がもっと出てくるのではと思います。

鈴木　一応なんかそういう、え、何でした？　地域移行班みたいなのができてるんでしたっけ、JCIL でそういうこと担当する。

岡山　そういうわけではない。

鈴木　あ、そういうわけではない。

岡山　だけど、たまたま宇多野、そうやってチームで始まって、大藪さんが行こうって言い出して、そこら辺ある程度は決めた人たちで関わったから、そこはそれで。だけど、また別の人が別の、例えば施設から出るとかなったら下林さんががっつり関わるとかになるかもしれないし。

鈴木　ああ、そうですか。今そういう、なんか調査されてますよね。

岡山　そうそう。それもありますね。どこまで誰が行けるかとかにもよるやろし、もうちょっと年が上の人たちはそんなしょっちゅう行けないとか、しんどいとかもあるやろし。

鈴木　大体お伺いできました。ありがとうございました。今 2 時間たちましたんで。

岡山　ああ、そうですか。

鈴木　はい。すみません。そう。

（了）